

校長会報

第152号

宇都宮市立中央小学校
栃木県小学校長会事務局発行責任者
堀 場 幸 伸印刷所
(有)正栄社印刷所

主張

「No」と言える校長に

栃木県小学校長会副会長

秋山 広美



「No」と言える日本」という本が一九八九年に大ベストセラーとなりました。当時のソニーの会長、盛田昭夫氏と作家の石原慎太郎氏による共同執筆のエッセイで、当時二十五歳だった私も読んでみました。そのときは「アメリカに『いやだ』って言おう」っていうことなんだな、くらいにしか思っていませんでした。ノーと言えない民族、日本人。これは私も含め多くの人が引きずる宿命なのかもしれません。特に、

このような日本人を育成してきた教師。そのものが様々なことにノーと言えずに苦しんでいます。

「これは学校の役目ではない」「これは教員の業務ではない」「この時間は先生は学校にいない」ということが言えずに長年教員は滅私奉公してきました。いつしか、「地域のことは学校がやる」「困ったことがあれば先生にやつてもらおう」ことが社会通念としてまかり通ってきた結果、学校はどこよりも敷居が低くなりメンタルを病み、離職を余儀なくされる教員が増え、やがて若者が教員そのものを敬遠する事態となりました。

教員の処遇改善や働き方改革が国の先導の下に進められてはきましたが、なかなか学校以外の人々に浸透していないのが現状です。校長が思い切って「No」と言えればいいのですが、地域の皆さ

んや保護者の方々との衝突は避けたいものです。できるものとはできないものをはっきりさせ、丁寧に説明し理解をいただくことが私たち校長の仕事でもあります。

そこで、昨今設置されている「地域学校協働本部」のメンバーの方の見識の広さと協調性を頼りに、そのような方に、会議の中で説明していただくのが良いでしょう。

「今まで学校にご協力いただいていたこの行事は、休日では先生方の時間外勤務になつてしまうので、地域の方で準備運営をしましょう」など。校長として、業務を精選し、何に力を入れればいいのかをはっきりさせることで、先生方にやりがいと活力をもつていただくことが肝要です。

三十五年前から求められてきた「ノーと言えぬ力」が、学校にも今求められています。
(佐野市立界小学校)

主張

出合いに感謝して

栃木県小学校長会副会長

坂本 美保



今年、小学校長会副会長の役割に携わる機会をいただきました。力不足ではありませんが、同じやるなら喜んで、できうるかぎり取り組もうと考えました。

理事会では、「教育課程編成の工夫・時数の確保・課題等」をテーマに下野市や本校の現状を述べました。学習指導要領の趣旨を踏まえ、一人一人が参画する「本校ならではの」教育活動実現に向けた学校経営が求められています。実際に各地区や各学校により年間授業時数(週時数)の違いがあり、創意ある日課の工夫、社会に開かれた教育課程編成を目指しての取組が見られました。これらはコロナ対応が求められた学校休業期間を経た学習指導の影響や学校行事の在り方、また、魅力ある職場環境づくりのための働き方改革推進

の現れでもあると思います。様々な取組の工夫や課題を知ることで、多面的に振り返ることにつながりました。そしてコロナ後の現在、縮減された特別活動や地域に関わる行事等をどのように継続するかが問われています。

「日本型学校教育」は、教師が学習指導のみならず、生徒指導等においても主となり、様々な場面を通じて、子どもたちの状況を総合的に把握して指導を行うこと、知徳体にあたる全人教育を目指すことです。その前に山積する喫緊の課題「働き方改革や処遇改善」「教員不足と教員の確保・質の向上」、自分のできることは、と考えるとやりたいことが湧き上がってきます。少し先に希望を見つつ現在を生ききる、今に精一杯取り組む、甚だ情緒的、感覚的ですが、そのように過ごしてきました。数々の失敗もしましたが、その度に多くの方々に助けていただきました。県内外の校長先生方とご一緒させていただく中で、先生方は皆魅力あふれ、「人間は一生のうち逢うべき人に必ず会える。しかも一瞬早すぎず、一瞬遅すぎないときに。」を噛みしめています。

(下野市立細谷小学校)

栃木県小学校長会中央研究大会

令和六年度の中央研究大会は六月二十八日(金)、栃木県総合教育センターで開催された。

一 開会

◆開会の言葉

秋山 広美 副会長

◆会長あいさつ

堀場 幸伸 会長

◆来賓あいさつ

阿久澤真理 県教育長

二 研究発表

◆研究発表Ⅰ

○研究テーマ

「自ら未来を拓いていくための資質・能力を育む教育課程」(学習効果の最大化を図るための取組)

○発表者

大田原市立須賀川小学校

校長 田代 充 先生

○発表内容

Ⅰ 現状と課題

本市では、未来社会を拓いていくために必要な力を「社会適応力」ととらえ、具体的には、予測困難な状況に主体的に対応する力、変化の中で自ら新たな価値を創り出す力、多様な立場の者と協働しながら最適解や納得解を生み出す力等と位置付けた。社会適応力の育成には、社会に開かれた教育課程のさらなる推進が必要と考え、研究を焦点化し、校長の役割と指導性を

模索することとした。

Ⅱ 研究の概要

1 基本方針

- ・実践研究を継続実施・共有し、教育課程に生かす。
- ・社会適応力を、地域とともに育成する。
- ・社会適応力育成のために教育課程を工夫する。
- ・学習効果の最大化を図る研究に取り組む。

2 研究内容

- ・学習効果の最大化を図るため市教委の教育施策と連動させる。
- ・これまでの取組や実践を基に検証する。
- ・校長としての役割と指導性を教育課程の工夫、学習効果の最大化の視点で追究する。

3 校長会が連動して研究した市教委の教育施策

1 小中一貫教育

2 コミュニティ・スクール(学校運営協議会)

4 取組の実際

- (1) 小中一貫教育
- (1) 各種学力調査を基にした取組
- (2) ICT活用推進事業に関する取組
- (3) 英語教育の推進に関する取組
- (2) コミュニティ・スクールに関する取組

1 学校運営協議会との協働

2 地域学校協働活動の推進

5 各種調査結果

学力及び質問紙の結果から、社会に開かれた教育課程を推進することは、社会適応力の育成に有効であると考えられる。

6 校長の役割と指導性

- (1) 地域・子供の実態に基づく教育課程の編成
- (2) 校長の考えを、繰り返し地域と教職員に提示
- (3) 教職員や地域の参画意識と意欲の向上
- (4) PDCAサイクルと計画への位置づけ
- (5) 教育課程に係る指導助言
- (6) 人材の育成
- (7) 校長会での情報共有と自己研鑽

Ⅲ 研究の成果と課題

1 成果(抜粋)

- (1) 校長がパイプ役となることで、市教委と学校、教職員同士、地域と学校のベクトルを揃えることができた。
- (2) 学習効果の最大化を図るためには、校長が積極的にマネジメント等に関わることで、校長が重要な役割を果たした。

2 課題(抜粋)

- (1) 保護者・地域への学校経営ビジョン等の一層の浸透や学習効果の最大化を図るために、これまで以上に地域とともに子供たちを育てていく必要がある。
- (2) 今後も、授業改善や社会に開かれた教育課程の推進に向けた効果的なPDCAサイクルを確立する必要がある。

Ⅳ 提言

・校長は、未来社会を拓くための学力を育むため、学校経営の明確なビジョンを掲げ、地域とともに教育課程の編成や工夫に努めなければならない。

・校長は、教職員の人材育成やベクトルを揃えるため、常にリーダーシップを発揮しなければならない。

◆研究発表Ⅱ

○研究テーマ

「これからの学校運営を担うミドルリーダー・管理職の育成」(学校組織の活用とOJTの実践)

○発表者

高根沢町立東小学校

校長 蛭田 稔 先生

○発表内容

Ⅰ 現状と課題

本地区では、年齢層毎の人数の偏り、教職員を目指す人材の不足等の課題が挙げられる。学校運営を持続するため、組織としては現在の年齢構成を強みにすること、教職員一人一人の学び続ける意欲と資質・能力の向上を図ることが必要であると考え、研究課題を人材育成に焦点化し、実践を重ねてきた。

Ⅱ 研究の概要

1 研究のねらい

校務分掌の構成員の工夫や学校評価組織の活用による、ベテラン・中堅教職員のリーダーシップ発揮と学校運営への参画、校内研修やOJTによる教職員一人一人の授業力、学級経営力等の向上をね

らいとした。

2 実践内容

(1) 校務分掌・学校組織における実践

① プロジェクト部会の導入

② OJT等の実践

③ 授業力の向上と授業改善

④ 相互授業参観

⑤ 管理職による授業訪問

⑥ 研修等での実践

⑦ 高根沢町小中一貫教育

⑧ 施設併設型小中一貫教育

Ⅲ 研究の成果と課題

1 成果(抜粋)

- (1) 話し合い・研修等を通して、ミドルリーダーとしての意識、学校運営への参画意識が高まった。
- (2) 管理職等の訪問や相互参観など、互いに学び合うことは、授業力向上に効果がある。

2 課題

(1) プロジェクト部会等、会議が増加してしまいうため、負担の少ない集まり方や情報収集の工夫が求められる。

(2) 授業訪問・参観の時間調整に困難な面がある。参観者、時間が限定されるなどが課題であり、調整が必要である。

Ⅳ 提言

・現在のミドルリーダーは多数のベテランの存在により、学校運営の核となることが少なかった。校長として、ミドルリーダーやベテランが学校を運営するという意識を高めるようにすることが重要である。また、働き方改革を推進し、職員の自己研鑽、子供と向き合う時

間の確保が急務である。

三 講演会

○講師紹介

郡司 一弘 副会長

○演題

「生成AIの基礎と活用の可能性」

○講師

東京大学大学院工学系研究科
准教授 吉田 壘 先生

○講演内容

Ⅰ 生成AI(主にChatGPT)生成AIとは

・学習データをもとにテキストや画像などのコンテンツを生成できる人工知能で、主に対話型生成AIと「画像生成AI」分けられる。

・ChatGPTとは対話できるAIで、大規模言語モデルGPTを基盤として、人との対話に特化させて学習させたモデルであり、基本的に言語で記述される課題に対してプロント(テキスト)を入力することで、何から回答を出力してくれる。

・最近では画像認識・生成、音声認識・合成等もできるようになっており、ChatGPTができることの例としては、読書感想文作成、レポート作成、選択問題の作成や回答などが挙げられる。

・ChatGPTが得意なこと、苦手なこととしては、正確な情報を述べること(でたらめを言うことがある)、情報源や最新の情報を示すこと、自動生成された文章を検出することなどが挙げ

られる。

Ⅱ 教育と生成AI

1 生成AIの可能性

・教育現場においては学習者による活用例として「個別学習支援」や「グループ学習支援」、教職員による活用例として、「授業支援」や「校務支援」が挙げられるが、①出力が不正確な場合がある、②評価の妥当性が低くなり得る、③バイアス・毒性が存在するなどのリスクもある。

2 対話型生成AIが与える教育への影響

・分野によって影響度合いは異なるため、一概に影響度合いを述べることは難しく各分野における検討が肝要である。ただ、学校というシステムに破壊的な影響は与えないと思っている。

・授業・学習においては、評価の妥当性を下げ得る可能性はあるものの、学習プロセスを支援し得る、教員の授業作りや校務を支援し得ると考える。ただし、本質的には、生成AIで楽をしたいと思われるような授業・課題ではなく、もっと自分で学びたい、自分で取り組みたいと思ってもらえるような授業・課題作りが重要だと思っている。

・対話型生成AIに対応した評価方法案としては、利用に関するポリシーを明確に伝えること、物理的に禁じて、対面で書かせたり口頭

試問にしたりする、成果物を自動生成しにくい課題にすることなどが考えられる。

3 教育における有効活用に向けて(抜粋)

・出力の信頼性が高くないことから、AIは副操縦士、自分が操縦士であることを認識してもらう。

・学習者だけでなく、教員、保護者のAIリテラシー教育が肝要である。

・新しい技術が登場したとしても、それを理解し、メリットとデメリットを把握して、活用する力を養ってもらう。

4 その他の論点

・知識の重要性は増すであろう。

・学習者の思考停止よりも信頼性の低い出力による誤った学習の方が懸念あり。

・学習の格差は広がり得る。

・非認知能力、非言語コミュニケーションの価値が相対的に向上し得る。

Ⅲ 初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的ガイドライン

Ⅳ 対話型生成AIの活用に関する注意点

(1) 生成AIは副操縦士、操縦士はあなたです。

(2) プロンプトや対話の仕方によって出力が変わる。

(3) データを言うことがある。

(4) 生成された文章の検出は難しい。

(5) 学習データとして利用される可能性がある。

(6) 個人情報・機密情報の入力は基本しない。

(7) 著作権に注意した方がよい場合がある。

(8) バイアス・毒性があることを認識する。

V おわりに

・まずは自分で使ってみること

・AIは副操縦士であり、操縦士である本人の知識、思考、意思決定が重要である。

○講演概要については、令和七年三月発行の『小学校長研修記録六十四』に掲載

◇謝辞

口川 和伸 副会長
坂本 美保 副会長



柘の葉

栃木県教育委員会
学習指導要領の趣旨の実現を目指して

平成二十九年三月に改訂された小学校学習指導要領では、新しい時代に必要な資質・能力を一層確実に育成することができるよう、「カリキュラム・マネジメント」の充実や「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められております。全面実施から五年が経過し、県内の各学校においては、特色ある教育課程を編成し、創意工夫ある教育活

動が展開されております。

そのような中、今年九月に、次期学習指導要領の改訂を見据えて、「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会」の論点整理が公表されました。そこでは、「カリキュラム・マネジメント」について、学校における実施の認識が高まっていることを評価しつつも、教育計画を立ててそれを遵守することに注力してしまっており、年度途中でも柔軟に見直しながら実施していくことに課題があるなどの指摘がされております。

県教育委員会では、令和三年度から、小・中学校教育課程研究集会の開催や「まとも動画」の配信等を通して、教育課程の適切な編成・実施や授業改善に向けた取組の一層の充実を支援して参りました。この「まとも動画」では、教育課程を編成する上で参考になる各校の研究実践等を紹介しておりますので、ぜひ御活用ください。

各学校におかれましては、学習指導要領の趣旨を踏まえ、学校教育目標の達成に向け、校長先生のリーダーシップを存分に発揮していただくとともに、家庭や地域との連携・協力の下、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開していただきますよう、引き続き御尽力願います。

地区だより

・・・〔宇都宮地区〕・・・

本地区では、活動目標を「自ら未来を創造し」とともに生きる社会を創る子どももの育成を目指す 学校経営の推進」とし、学校経営、社会への対応、危機管理、働き方改革など八のテーマに沿って研究を進めた。

七月の研修会では、全連小及び関ブロ大会についての報告と班別研修を行い、各学校における様々な取組について紹介し合うとともに成果や課題を共有した。

また、十一月の上三川地区校長会との合同研修会では、宇都宮市教育センター学校生活適応支援アドバイザーの大瀧伸一先生より、「不登校児童への対応と校長の役割」について講話をいただいた。

二月には、班別研修の集大成として各班の研究発表を予定している。

・・・〔上三川地区〕・・・

本地区では、「不登校の現状と対応のあり方について」という研究主題を設定した。

九月の研修会では、各校ごとに現状と対応について発表し、特に校長としての役割を中心に協議を行った。

また本地区小中学校合同の研修会では二人の講師をお招きした。栃木県教育委員会事務局河内教育事務所学校支援課副主幹の野口幹先生からは、「不登校の現状と支援のあり方」について詳しくご説明いただき、スクールソーシャルワーカーの和久知恵子先生からは、「いかにアセスメントして、支援につなげるか」が大切であるとお話をいただいた。いずれのお話も豊富な実践を踏まえての内容であり、有意義な学びの時間となった。

・・・〔上都賀地区〕・・・

本地区では、研究主題を県の基本目標と同一としていく。鹿沼市は「ともに学び続け心豊かに生きる子どももの育成を目指す学校経営の推進」、日光市は「校長の資質の向上と様々な課題への対応」とテーマを設定し、二市で連携しながら研究に取り組んだ。六月の全体研修会では「学力向上を目指す学校経営」「人材育成を目指す学校経営」「健全育成を目指す学校経営」の三部会に分かれ研究協議を行い、各学校における課題や取組を紹介し合うとともに改善点等を協議した。一月の全体研修会では、元県立高等学校長のコミネシゲオ様をお招きし、「歌で綴る講演Live」を行った。大変有意義な学びの時間となった。

・・・〔芳賀地区〕・・・

本地区では、研究主題を「自ら未来を創造し」とともに生きる社会を創る子どももの育成を目指す学校経営の推

進」と定め、研究を推進してきた。

全体研修会を年三回実施した。六月の第一回研修会では、研究についての方向性を確認し、九月の第二回研修会では、各校の研究実践を持ち寄り、研究主題に迫るためのグループ討議を行った。各校の様々な取組が紹介され、大変有意義な時間となった。

二月の第三回研修会では、元宇都宮大学教職大学院教授の瓦井千尋先生に講話をいただき、学校における危機管理について学んだり確認をしたりした。

・・・〔下都賀地区〕・・・

本地区では、研究主題を、「未来を見つめながら学びに向かい、学ぶ喜びを分かち合える子どもの育成」とした。さらに関ブロ新潟大会での分科会のテーマ「情報社会を生き抜く子どもを育てる情報教育」も踏まえ、各学校で実践を行ってきた。十一月の全体研修会では、①学ぶ力を育む取組 ②学業指導の充実に向けた取組 ③

ICTを効果的に活用しての授業改善の取組を研究の視点とした実践の発表と研究協議を行った。協議では各校での、児童の学力向上につながる授業改善や人材育成（若手育成）について、活発な意見交換を行い、今後の学校経営のヒントも得ることができた。

・・・〔下野地区〕・・・

本地区では「自然災害・気象変動への対応」の研究主題の下、「学校における危機管理の観点から」を副題として研究を進めてきた。

六月には、市校長会の研修会として、「自然災害への対応（危機管理）」と題し、気象予報士・防災士の平井信行氏に講話していただき、研修を深めることができた。今回の研究で、最新の情報をどう手に入れるかなど、具体的に「今できること」が分かるとともに、未然防止の重要性を理解し、児童の発達の段階に応じた防災教育の充実が必要であることに気付くことができた。一年間の研修を通して、

最悪の事例を踏まえて、当時の対応を検証することで、今できる準備に対する情報と心構えを確認し、いかに最善を尽くすことができるかを学ぶことができた。

●●●〔小山区〕●●●

本地区では、二班に分かれ、A班は「次世代を担う管理職育成の在り方Ⅲ」管理職のバトンをつなぐ持続可能な学校経営に向けて

「B班は「理想の校長を目指して2」と研究主題を設定し、各校の実践や意見交換を中心にそれぞれの班別研修を進めた。

また小中全体研修として、二回の教育講演会、学校経営実践発表会、班別研究発表会を実施した。九月の教育講演会では、筑波大学星野豊教授をお招きして「学校トラブルの現状と対応」ハラスメントといじめの問題を中心に」と題する講話をいただいた。大変有意義な学びの時間となった。

●●●〔栃木地区〕●●●

本地区では、今年度の研修テーマを「これからの社会を担う子どもを育む創造的な学校経営ビジョンの策定とその推進」に設定し、研究を進めてきた。四つの

研修班に分かれて、各校が持ち寄った資料を基に実践内容についての発表及び協議を行った。

「学校課題研究等における同僚性を生かした学び合いの研修」や、「地域・近隣小中学校と連携した『チーム学校』の意識を高める体制づくり」など、具体的な取組の事例が紹介され、成果や課題を共有したり、アイデアを出し合ったりして学び合うことができた。

来年度は、関ブロ新潟大会で栃木市が提案発表を控えているため、そのことも見据えた内容の研修となり、大変有意義であった。

●●●〔塩谷南那須地区〕●●●

本地区では、研究主題を「自ら未来を拓き 共に生き

る社会を創る子どもを育む学校経営の推進」とし、この地区の研究主題を下に、六つの各市町校長会が独自性を生かした研修テーマを設定し、多くの視点から研修を進めている。

五月から十一月の研修部会では各市町の研修の成果と課題を確認した。

九月の全体研修は、タイガーモブ株式会社共同代表取締役の中村寛大氏を講師に迎え、「Learning by Doing」世界を舞台に挑戦する教室」の演題で講演をいただき、有意義な学びの時間になった。

●●●〔那須地区〕●●●

本地区では研究主題を「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の全体主題を踏まえ、大田原市、那須町、那須塩原市が、各市町の特色や実態に応じた研究主題を設定し、各学校の現状や問題点、取組などを基に研究を進めてきた。令和四年度から三年間の研究を進め、

今年度が研究のまとめとなる。五月に全体研修会及び分科会、七月に研究主題における各市町の研修会を経て、十一月末の全体研修会で、各市町の取組について発表を行った。

研修会での協議や全体会での発表を通し成果や課題が明確になり、各校の学校経営の改善に生かすことができた。

●●●〔佐野地区〕●●●

本地区では、全連小徳島大会での提案を控えていたこともあり、大会主題及び副主題を受けて、所属分科会のテーマに沿うべく、地区として「続・教育現場のリーダーを育てる人財育成」を共通の研究主題として設定した。そして、これまでの研究の進め方と同様に四つの研修班に分かれて、実践内容についての発表及び協議を行った。その後、各班で実践された取組について成果や課題を確認し、共有を図った。

十月には全連小徳島大会において本地区としての人

財育成に関する取組内容について提案発表を行い、多大な示唆を受けることができた。

●●●〔足利地区〕●●●

本地区では、県小学校長会活動目標である「自ら未来を創造し ともに生きる社会を創る子どもを育成を目指す 学校経営の推進」を踏まえ、二十二の小学校を三つの班に分け、各校での実践や意見交換を中心に研修を行った。今年度は、近隣地域の学校で班を構成し、特に「地域との連携」や「小中の連携」等について、成果と課題を確認した。

また、「働き方改革に係る教育環境の整備」について情報交換を行い、業務改善等について話し合いが行われた。

どちらも、継続的な研究や取組が必要であり、校長として学校経営の意識を高めることができた。



自ら未来を創造し ともに生きる社会を創る子どもの育成を目指す学校経営

明日も行きたい学校を目指して

鹿沼市立板荷小学校 小高 勝則

本校は鹿沼市の北部に位置し、日光市に隣接している山村地域にあります。全校児童数三十九名、一・三年生、四・五年生が変則複式学級です。学校作りのスローガンとして「明日も行きたい板荷小」を掲げています。

今年度は、育てたい資質・能力の中で「自己解決力」を重点課題としました。その力を育むために「GYM(ジム)で子供を鍛えよう」G:我慢(口を出したい、手を出したいけど我慢)

Y:やらせる(子供たちが活躍できる場面・関心をもてる場面を意図的に)

M:任せる(失敗も戸惑いも成長のプロセス)

という合い言葉を決めました。この言葉を学校だより等で保護者、地域にも知らせ、子供たちに関わる全ての場面で自分で考えて行動できる「自己解決力」の向上を目指した指導を進めてきました。

その一環として、今年度は代表委員会で様々な取り組みを児童が考え実践しました。「板荷小学校のみんながもつと仲良くなつて学校生活を楽しくしよう」という目標をもって、様々な集会等が企画されました。一年生を迎える会、こどもの日集会、県民の日集会、七夕集会、全校共遊など、どの集会も児童のアイディア



学校運営協議会



一年生を迎える会

が満載の楽しいものでした。七月には「全校プール」を企画して、全児童、全職員で楽しいひとときを過ごしました。(もちろん安全面は職員が管理しました)

また、十月に行われた学校運営協議会では、六年生の児童が「板荷小をよりよくするためにこんなことをしてみたい、こんなことをしてもらいたい」という考えをまとめ、発表しました。六年生が自分たちの卒業後の板荷小のことも考えている様子に、協議会委員の方も感心してくださいました。

これらの様子を、学校だよりやHPで公開して開かれた学校作りを進めています。

学校だけでなく、家庭や地域の協力を得ながら、育てたい資質・能力を明確にした学校運営を今後も心掛け、児童にとって「明日も行きたい」と思えるような学校を目指していきます。

人とのつながりの中で

足利市立名草小学校 保々 悦子

本校は、足利市の北東部に位置し、緑豊かな山々に囲まれた静かな里山にあります。創立は明治八年十月一日で、来年度百五十周年を迎えます。現在児童数は五十名で、複式学級が二学級あります。児童同士は全員の名前と顔がわかり、誕生日や趣味等も覚えていきます。登下校や休み時間・昼休みも学年の垣根を越えて一緒に過ごす、みんなが友達の小規模校です。

本校には、代々受け継がれている「残す教育・出す教育」という経営方針があります。伝統ある学校で培われた自信と誇り、ふるさと名草を愛する心をもつて、どんな場所でもたくましく生きてほしいという考えをもとに、人とのつながりや地域とのつながりを大切にした教育活動を行おうというものです。

名草小には、本校の児童をいっばんに考えてくださる地域の応援団の皆様がいます。名草の名産である「しょうが」「源氏ボタル」の学習、藍染め体験や稲作体験等、実感を伴う多くの学習活動があります。児童は、専門的な知識や技能の習得と教えてくださる方の人となりを感じ、自分の生き方に生かそうとしています。先人の努力、感謝、思いやり、生命尊重等、多くのことを日々学んでいます。

小規模校である本校には、全学年



藍染め体験



しょうがの収穫

すでに地域の方を交えた百五十周年記念事業のための実行委員会が立ち上がりました。今後も人とのつながり、名草小ならではの教育活動を地域・学校が一体となって推進していきたいと思っています。

特色ある学校づくり

地域とともに歩む学校づくり

那珂川町立馬頭東小学校 江田 清水

本校は、那珂川町の東の端、茨城県との県境に位置し、平成二十二年四月に旧大山田小学校、谷川小学校、大内小学校の三校を統合し、馬頭東小学校として新設された開校十五周年を迎えた学校です。東西を里山に囲まれ、学校の西側を大内川の清流が流れる自然豊かなところです。

全児童は三十八名で、一・二年及び五・六年が複式学級であり、特別支援学級を含めて五学級のへき地複式校となっています。保護者や地域の方々の学校教育に対する関心は高く、大変協力的です。

このような本校の特色を生かして、目指す学校像を「**①**ひとり一人を大切に **②**んばる心が育つ **③**あわせな学校」とし、学校と地域が一体となつて子どもの育成を目指す「地域とともに歩む学校づくり」を推進しています。小規模校のよさを生かしながら、学校運営協議会と地域学校協働本部（東っ子助け隊）の一体的推進を図り、地域コーディネーターを中心に、学校と地域が連携・協働した地域の「ひと・もの・こと」を生かした活動を行っています。

○馬頭東子ども祝い太鼓（五・六年総合）

旧大内小学校時代から四十年以上も続いている本校の伝統であり、ボ



馬頭東子ども祝い太鼓



大内川での川遊び

ランティアの方に指導をいただき、入学式や卒業式など祝い事の時に演奏しています。

○地域探検（三～六年総合）

学校運営協議会の熟議から生まれた活動です。地域のスポーツ推進委員さんをはじめとした、地域のボランティアの方々と一緒に大内、盛谷、大山田の三つのコースに分かれて地域を歩き、地域を知る活動を行っています。

○サマースクール（夏休み）

昨年度実施した地域のボランティアの方々による夏休みの宿題サポートに加え、今年度は、竹細工や木工の体験学習も実施しました。

今後とも地域とともに効果的に教育活動を進め、自ら学び、たくましく生きる、心豊かな子どもたちを育成していきたいと思っています。

ふるさとに誇りをもつ児童の育成

佐野市立栃本小学校 野代 和美

本校は佐野市の中心部から約6km程北に位置し、唐沢山と秋山川のほとりに建つ自然に恵まれた学校です。校舎の前には樹齢一五〇年の大いちょうがそびえ立ち「仲良く 根気よく たくましく 大いちょうのような人になれ」という校訓にもなっています。児童数は五十一名で、二・三年生と四・五年生が複式学級の小規模校です。自然や人に恵まれた地域の環境を生かし、総合的な学習の時間を中心に「地域で学ぶ地域を学ぶ」ことを実践し、ふるさとに誇りをもてる児童を育成しています。

○ぎんなん活動

校木大いちょうは秋が深まる頃になると、銀杏の実をたわわに実らせます。その実をつぶして取り除き、きれいなぎんなんに加工して販売します。この活動は本校の特色として長年継続してきました。児童数の減少に伴い、ボランティアの方にも作業へのご協力をいただいています。毎年地域の方がぎんなんの販売を楽しみに待っていてくださり、販売日にはたくさんの方に購入していただき、地域との結び付きを実感できます。

○地域を生かした学び

学校から徒歩で一〇分の所に国指定史跡唐沢山城跡の登り口があります。貴重な史跡に児童が親しみをも



昨年のぎんなん販売の様子



五・六年総合「唐沢山城の歴史」

五・六年生の総合のテーマは「栃本の人々はどうの願いをもっているのだろうか」とし、唐沢山城跡保存会の方から歴史や保存活動に対する思いを学び、現代に生きる自分たちとの結び付きを認識することができました。また、三・四年生は「栃本にはどんな伝統があるのだろうか」というテーマで、昔から受け継がれている地域の行事「浦安の舞」「七つの子の祝い」や瓦産業等について話を聞いたり体験をしたりしました。

今後とも地域の皆様のお力をお借りして、温かいふるさとを誇りに思う児童の育成に努めてまいりたいと思っています。

話 題 の 広 場

地域とともにある学校づくり

上三川町立北小学校
小嶋 真穂

昭和五十五年の開校した本校は、今年創立四十五周年を迎える。地域の方々の願いが詰まった「おらが学校」であり、創立当時の校庭の遊具は、地域の方による手作りであったと聞いている。

平成二十七年には、全日本学校関係緑化コンクールで学校環境緑化の部準特選を受賞したのをはじめ、多くの緑化コンクールで受賞するなど、敷地内は緑豊かである。校庭には広い芝生も広がっている。

保護者や地域の皆様は、学校の教育活動に大変協力的で、この豊かな自然を守り続けられるのも、皆様の協力のおかげである。

また、「スクールガード」や「見守り隊」として、毎日子供たちの登下校の安全を守ってくださっている地域の皆様には、心から感謝している。登校時、子供たちと別れる際に、校門でハイタッチをする光景には心が温まる。

本校の特色の一つに、校庭南側にある田圃で行われる稲作活動がある。地域の稲作指導者をお招きして、六月

に田植え、十月に稲刈りを全校生が行う。田圃の代掻きなどの準備や管理、稲刈り後の脱穀などは、先代PTA会長をはじめ執行部の皆様のお力添えがある。

このように、地域の皆様の協力なくして本校の教育活動は成り立たない。これからも学校と地域が連携・協働し、地域とともにある学校づくりを推進していきたい。



稲刈り



田植え

伝統と自然の中で育つ

那須塩原市立鍋掛小学校
宇梶 誠司

本校の歴史は、明治六年まで遡る。

正観寺を借りて日新館として開校した。日新館の名は、江戸時代における会津藩の藩校「日新館」に由来する。会津藩校日新館で学んだ人物が、鍋掛の日新館の先生を務めたことが記録に残されている。

そのような歴史的経緯から、本校では会津日新館「什の掟」が代々受け継がれてきている。時の流れとともに、今の時代にはそぐわない内容は淘汰されつつ、以下の「掟」が今でも生き続けている。

- 一 年長者の言うことにそむいてはなりません
- 一 年長者にはお辞儀をしなければなりません
- 一 うそを言うことはなりません
- 一 ひきょうな振舞をしてはなりません
- 一 弱い物をいぢめてはなりません
- 一 ならぬことはならぬものです

保護者や地域の皆様は正義感が強く、学校に対しても協力的、献身的である。それは、だめなものはいかなる理由があってもだめだという精神が、児童だけでなく保護者や地域の皆様にも受け継がれているからなのではないかと感動する日々である。

もう一つ、本校には、シンボルとなるものがある。学校横を流れる清川に棲むイトヨである。イトヨは市の天然記念物に指定されている。淡水魚で、現在三年生を中心に学習している。このイトヨをモチーフにしたオリジナルキャラクター「イトなべ様」が、児童により生み出され、今でも様々なところで使われ、愛されている。

このようすばらしい伝統と自然の中で育つ子どもたちが、さらに成長していけるよう、私たち教職員一同、頑張っていきたいと考えている。



オリジナルキャラクター「イトなべ様」

事務局だより

事務局長 小野 浩司

今年度は、中学校長会と共に説明した県教委との教育懇談会を、八月三日に実施しました。県内各地区からの要望や提案を総務部でまとめた提案事項について、その詳細については、十月の第三回理事研修会で報告し、また県小学校長会ホームページに掲載しましたので、ぜひご覧ください。

今年度は、六月の関プロ長野大会・十月の全連小徳島大会が例年の形で実施されました。関東甲信越地区や全国から多くの方が参加され、本県からも計七十一名の校長先生方が出席されました。今後は、それぞれの大会での報告等をホームページでご覧下さい。

感染症等がまだまだ見られ、今後はインフルエンザが流行してくると思います。より充実した学校運営を目指し、県小学校長会各地区での校長先生方の貴重なお考えや実践を基に、ネットワークを活用して会員の皆様で情報を共有しながら、校長会全体の充実と発展を図っていければ幸いです。さらに、校長先生をはじめとした管理職の先生方にも働き方改革の効果が発揮されればと考えています。

編集後記

今年の夏も真夏日、猛暑日が続く、熱中症指数(WBG T)測定器を何度も確認しながらの毎日でした。各校におかれましては、授業や昼休みなど、子どもたちの活動への配慮にご苦労されたことと推察いたします。

「地球沸騰化」。世界平均気温が過去最高を記録し、その影響が危機的状況であると警鐘を鳴らした言葉です。高温による熱中症のみならず、全国各地で発生している集中豪雨など気象災害の増加もその一部のようにです。

学校において何よりも優先されるべきものは、言うまでもなく児童の安心と安全を守ることです。学校を管理する立場として、日頃から危機管理の意識を高くし、その対応の見直しや改善、家庭、地域との連携を図るとともに、近隣の小・中学校とも情報交換しながら、危機管理体制の強化を図りたいと考えます。「備えあれば憂いなし」。子どもたちの笑顔のために努めていきますように。

本号発行に際し、ご多用の中、玉稿をお寄せいただきまして皆様に心より感謝申し上げます。

小山市立豊田小学校
星野 友保